

## 隔絶山村「秋山郷」の変貌

福原正弘 編

## はじめに

本論文はかつて隔絶山村と称された信州・越後の国境に位置する秋山郷のうち、信州秋山郷の中心地である小赤沢集落（長野県下水内郡栄村小赤沢）をフィールドとして、本学日本文化学科3年生14名の現地調査レポートを指導教官（福原）が編集したものである。

本学日本文化学科3年生の日本文化研究演習Ⅱ（地誌）では平成2年4～7月の授業時に秋山郷に関する文献を交替で読み、秋山郷に関する予備知識を得たうえ8月2～5日の4日間現地で合宿、調査を行ない、本論文をまとめた。

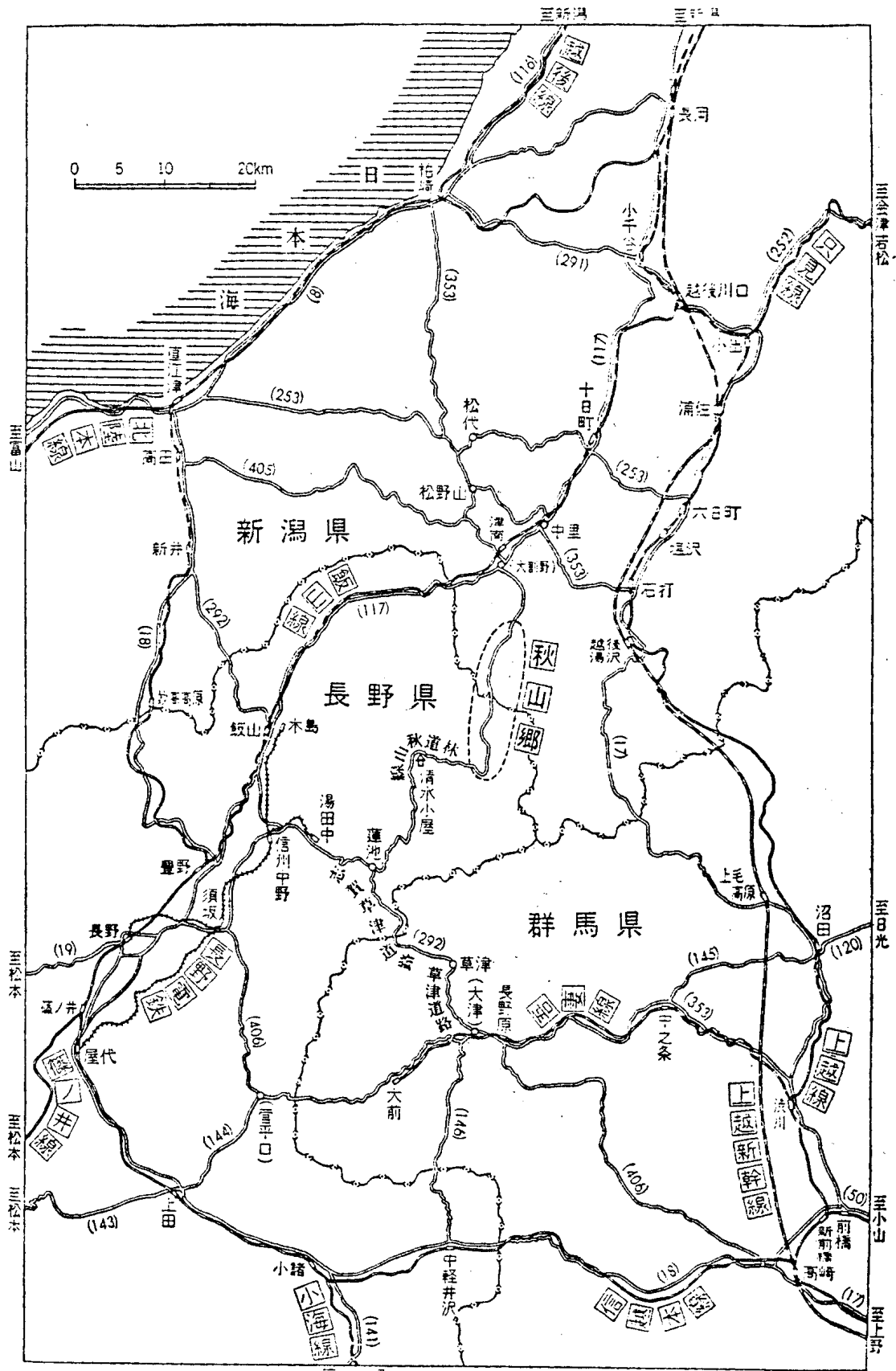
秋山郷に関する文献は多いが、その多くは昭和55年（1980年）以前に書かれたものであり、最近の秋山郷を分析した地理学の研究事例は殆んど無い。本論文は現在の時点における最新の信州・秋山郷の姿である。

## 1. 秋山郷の概要

## (1) 位置

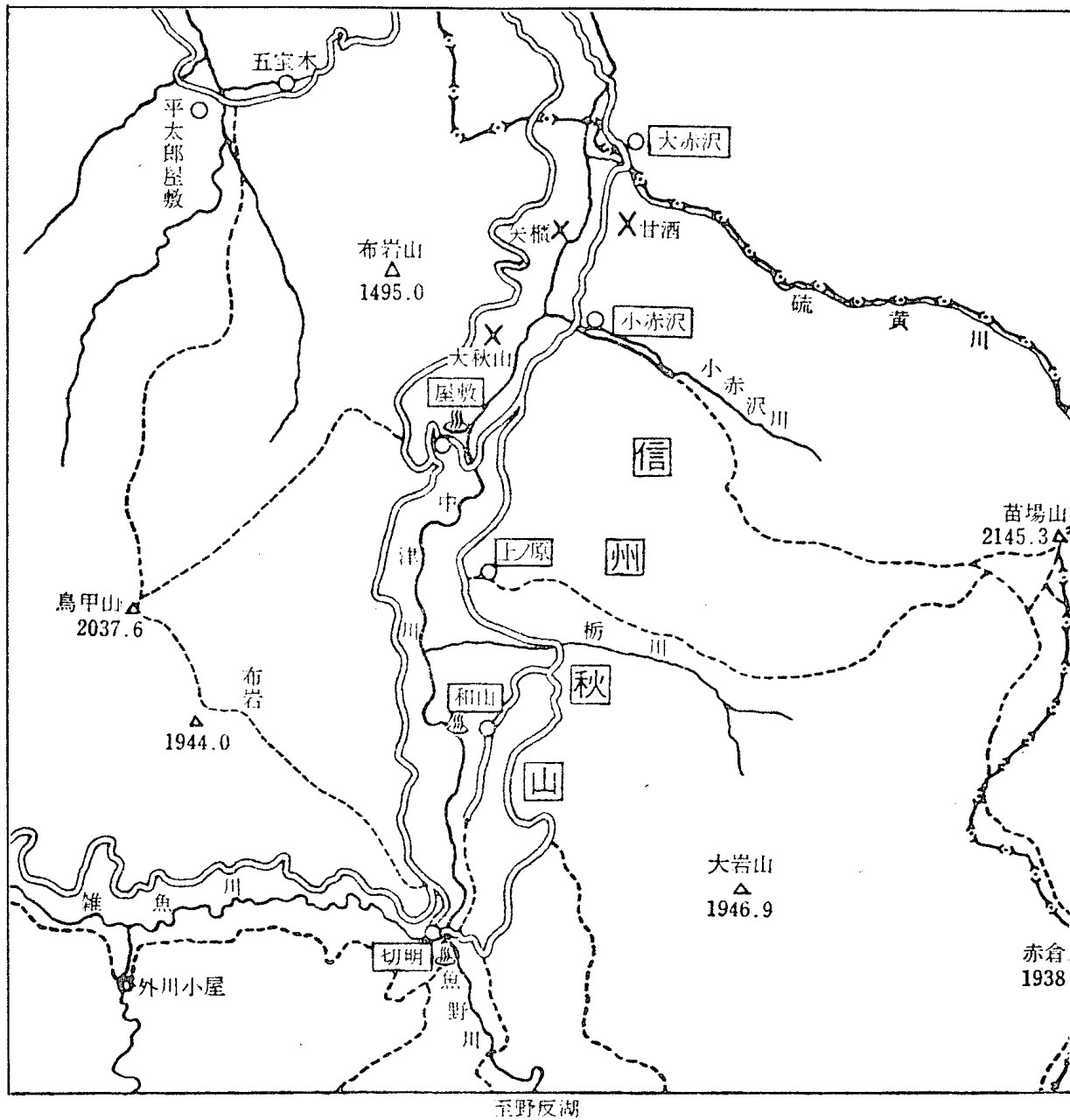
秋山郷は信越国境（長野，新潟県）にある苗場山と鳥甲山の谷を刻んで流れている中津川溪谷の上流に散在する12の集落を称している。行政上では新潟県の7集落は新潟県中魚沼郡津南町，長野県の5集落は長野県下水内郡栄村に属している。（第1～2図）

第1図 秋山郷の位置



資料 市川健夫 (1961) : 平家の谷

第2図 信州秋山郷の位置



凡例：○ 現存の集落、× 消滅した集落  
 資料：市川健夫（1961）：平家の谷

## (2) 歴史と現状

長野県下水内郡栄村は県の東北端で新潟県との境に当る。栄村の主要な部落から遥に隔絶し、信濃川の支流たる中津川の溪谷に入った地域に秋山と呼ばれる諸集落がある。この地域一帯は、苗場山、烏甲山その他の上信火山群に属する諸火山の噴出物によって被れ、またこの溪谷の斜面はかなり急であるため耕作地が狭い地溝谷だけに制限されてしまっている。このように作物を栽培するのが困難な土地であるにも拘らず、村人達は約800年もの間当地で狩猟、焼畑耕作、林業、木工業を糧として生活し続けており、当地は全国各地にある平家の落人部落の一つとも称されているがその真偽は明らかでない。その間には「飢饉の村」秋山郷と呼ばれているように過去2度の飢饉に見舞われるという惨事も起きた。この2度の飢饉（天明3年＝1783年、天保7年＝1836年）によって矢櫃、大秋山の2村（計14戸）が死に絶え、甘酒村も廃村となった。秋山郷を初めて世に紹介した江戸時代の文人、鈴木牧之は大秋山村を『秋山記行』の中でこう記している。「人家8軒ありてこの地根元の村にて祖伝の武器など持ちしものありしが、天明卯年の凶年に代なして糧にかへ、なおたらずして一村のこらず餓死して今は草原の地となりしときけり。」

このように秋山郷は人間の生活上極めて劣悪な環境の地域であった。

現在信州秋山郷は5つの集落で構成されており（実際には6集落あるが、このうち切明は東京電力（株）発電所関係の人々が中心で農林業に従事する人がなく異質な集落のため旧来の秋山郷からは除外されている）、その中心地は小赤沢集落である。切明を含めた6集落の戸数は141戸、人口435人で最近10年間で人口は27%減少している。（第1表）

当地域の産業は農林業を中心に兼業農家が多く、民宿、地元官公庁、企業へ働きに出ているが、近年の秘境ブームで民宿を中心とする観光業への動きが高まりつつある。

また本地域は同族集团的色彩が濃く、姓名も山田姓が圧倒的に多く、小赤沢集落では山田に加え、福原、阿倍の三つの姓で集落の殆んどを占めている。

第1表 信州秋山郷の集落別世帯数と人口数

	昭和26年 (1951年)	昭和35年 (1960年)	昭和45年 (1970年)	平成2年 (1990年)	人口数	
					昭和45年	平成2年
小赤沢	54	59	63	59	232	188
屋敷	30	39	37	34	130	102
上ノ原	21	24	27	26	101	72
和山	9	12	11	11	47	36
切明	10	5	4	1	28	3
五宝木	12	14	14	10	54	34
計	136	153	156	141	592	435

(資料) 市川健夫(1961): 平家の谷 p18 および栄村役場資料  
より作成

### (3) 交通

当地域では昭和16年に津南町より小赤沢まで、同27年には切明まで自動車道路が建設されたもの、11月下旬から5月上旬までの約半年間は積雪のため自動車は通行出来ず、交通が杜絶した「陸の孤島」と化していた。道路交通は昭和40年代に入って道路舗装、雪崩防止シェルターの建設等により年間を通しての自動車交通が可能となり、現在では冬期でも1日に3便のバスが運行しており便利になった。

また東京とのアクセスとしては、鉄道ではかつてはJR飯山線津南駅が玄関口となっていたが、上越新幹線の開通に伴ない越後湯沢駅がこれに代わり、上野から1時間14分、バス(津南で乗換え)2時間程度の合計3時間余りで結ばれている。また自動車を利用した場合は関越自動車道路の塩沢石打インターチェンジ(東京より175km)から定期バスと同様、国道135号、117号、そして秋山街道を通り秋山郷に至る。

新幹線、高速道路の開通により東京との交通が便利になったとは言え、越後湯沢や塩沢石打インターチェンジから現地までのアクセス(バス便の少

なさと乗換えの不便さ、道幅の狭さと屈曲状況等)に今後改善すべき問題を残している。

## 2. 農業の変貌

### (1) 農業の変化

#### a. 焼畑農業の消滅

秋山郷は中津川の狭谷に位置し、大部分が急斜面の地形であるためその農業はかつては経済的理由により開墾が出来ず、焼畑農業が中心でアワ、そば、ヒエ、大豆、荳草等を栽培し、アワ、そば、ヒエを主食としていた。焼畑は7月下旬から8月上旬の最も乾燥する時期に草木を薙り払い、一週間から10日程乾燥させ、周囲に延焼しないよう注意しつつ火入れをする。火入れの2～3日後に秋ソバをばらまきし、2年目から畝をたて、アワ、ヒエ、大豆等を栽培する。

秋山郷で水田耕作が始まったのは1875年(明治8年)とされているが、その後大正末期における発電所工事による現金収入の機会が生じた時期や戦後食料増産方針時期の2回の契機に開田が進められ、水田耕作が増加した。この結果生産性において劣後する焼畑耕作は昭和20年代半ばより減少し始め、30年代以降急速に減少が進み、40年代に消滅した。しかし昭和50年代になって小赤沢地区では毎年8月の第1日曜日に20アールの焼畑を行ない、学術参考と秋山郷の民俗記録として保存している。(写真1)

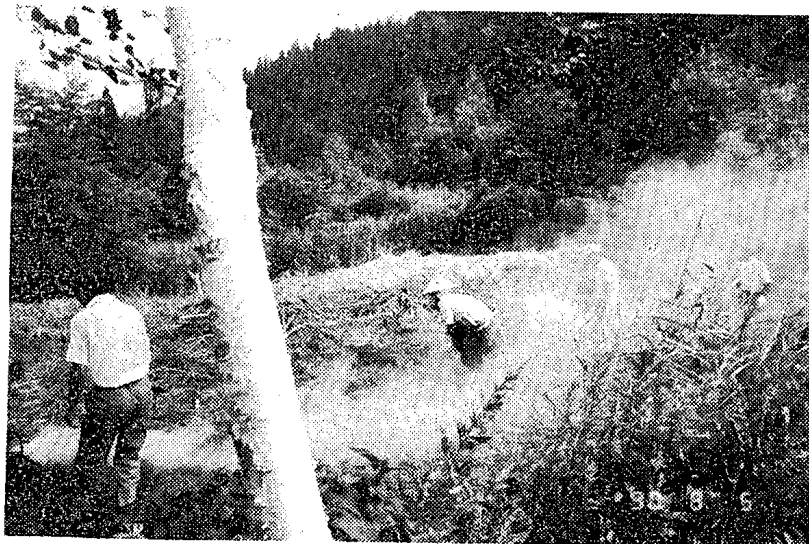


写真1 焼畑の火入れ (平成2年8月)

## b. 農家の現状

今回の現地調査では8件の農家の聞き取りを行なったが、栽培作物としては稲、きゅうり、トマト、ナス、キビ、大豆等で全て自家用であり、商品作物としては栽培していない。農地が狭いため一度に多くの作物を栽培することが出来ず、また早生新種という早く育つ稲を使用しているところが多いが、早生新種は普通の稲に比較して味が悪く、商品価値も低い。

農業従業者は老人が多く、作物も自家用のため現金収入は若い人の出稼ぎや勤めによる収入に頼っている。農業の期間は4～10月の約半年間であり、残る半年は積雪のため殆んど農作業は出来ない。農機具にしても耕運機は普及しているが、稲刈り機は農家の半程度しか所有しておらず、これは①耕地面積が狭いこと、②農業に対する意欲の無さ等によるものと考えられる。(第2表)

第2表 秋山郷の農家

		A 氏	B 氏
年	令	61才	41才
職	業	農 業	役場の職員
耕 地 面 積	田	4 反	な し
	畑	1反半	2反半
栽 培 作 物		米, 野菜	米・野菜
用 途		自家用	自家用
農 業 従 事 者		本 人	両 親
後 継 者		農業はしない	農業をやる気なし
畜 産		な し	な し
狩 猟		熊 (冬期)	熊・うさぎ (冬期)
兼 業		民 宿	な し
最近10年間の変化		品種改良により農作物の種類は多くなったが病害の発生がある。	特になし

## (2) 林業・木工業

### a. 林業の衰退

秋山郷では現在・個人による林業はほとんど行われていない。戦後しばらくの間、戦災からの復興の為に木材の需要が多かった時には盛んであったが、その後徐々に衰退していった。その理由としては、①林業の経済的価値の相対的な低下、②後継者の減少があげられる。

現在の林業は営林署がそのほとんどを管理しており、そこに職員として勤務するという形が殆んどである。

秋山郷の山林は国有林が最も多く、次いで村有林、私有林の順になる。植林されている樹木の種類としては、主なものに、とち、なら、ぶななどがある。最近では針葉樹を植林する事が多くなってきたが、昔はそのほとんどが枯葉樹であった。

現在でこそ林業は衰退してしまったが、山を美しく守る為には、ある程度の伐採を行う事も必要であると秋山郷の人々も考えているようである。経済的利潤を追求してしまう為に、秋山郷の山林の活性化が行われなくなってしまふのはさびしいことである。

現在の秋山を昔から支えてきた産業を根絶してしまうような事はあってよい事には思われない。片手間でも後継者が続いて行って欲しいと思う。

### b. 木工業

現在では、ほとんどが民宿や農業の傍ら副業的な存在で木工業が営まれている。秋山郷では、約20軒（就業者数も約20名）が木工業に携わっている。主に木鉢、座卓などが作られているが、昭和25年頃までは、くわの柄・コーツケなども作られていて、ほとんどの家でその作業が行われていた。また当時は、それぞれの家で専門に作られていた。

秋山郷における木工業製品の年間売上額はおよそ30百万円、そのうち木鉢が10百万円で3分の1を占めている。主な購売層はほとんどが観光客で、地域的には東京・新潟・長野・関西方面からの人々に売られている。また木鉢は各地のそば屋、うどん屋などの人々が購入しているようである。現地での販売店の営業は、5月～10月の間のみで、冬の間は店を閉めている。ま



た、この手彫りの鉢はほとんど秋山郷のみで行われている。

### c. 木鉢の製造過程

木鉢は、昔からの伝統工芸の手作りで行われており、今でもその需要は変わらない。主に栃の木、サワラの木で作られており、コネバチともいわれている。まず原木から鉢手斧（はちじょうな）と称されている手斧を使って荒削りし、次に鉢の内側を前かんなと鉢手斧で整える。そして鉢の外側の不要な部分を削り落としてから、柄の長いのみで仕上げていく。木鉢は削ってから乾燥させるが、夏場は乾燥しすぎるので、ほとんどが冬場に作られている。夏場に作る時は、溜池に漬けて材の目を固くしませしてから作られる。

座卓は国有林の栃・けやきから作られるが、秋山郷の座卓は、けやきが少なく、乾燥させた木から約1週間かかって完成させる。主な出荷先は、長野、新潟、東京、横浜で、組合、農協を通しており、展示会などにも出品される。

最近では、木鉢を自分で製作してみたいという人もおり、作り方を教えて欲しいという希望も多い。簡単なものは2、3日で完成させる事が出来るので、観光客の中には、自分で作っていく人もいるそうである。

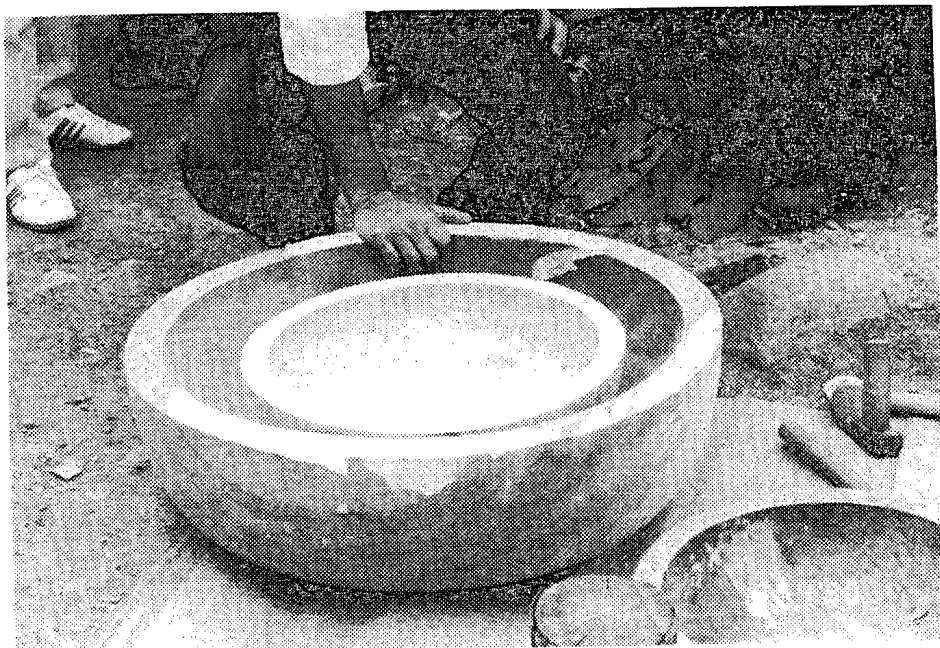


写真2 木鉢の製造 (平成2年8月)

### 3. 観光地化の進展

#### (1) 秋山郷の観光

##### a. 概 要

雄大で美しい自然に恵まれた秋山郷は、苗場山と鳥甲山にはさまれた細長い山峡で、冬は積雪が多い。春は高原に花が吹き乱れ、夏はあふれる緑にきらめく清流、秋はあでやかな紅葉、冬は一面の銀世界といったように美しい大自然が変わらぬ四季を展開しており、四季を通じて自然の観光に恵まれた地域である。

##### b. みやげ物

秋山郷が観光地として注目され始めたのは昭和58～59年頃からである。秋山郷の観光とは、自然が主体で釣り、登山、キャンプ、療養などである。特に目立った観光地ではなく、秘境ムードの残る観光地である。最近では観光客が多くなり、2～3年前からみやげ物が出来始めた。みやげ物屋といっても多くはなく、小赤沢には2軒しかない。みやげの品物は木工品が主流で、秋山木鉢、下駄座卓、テーブルなどである。ほかに、竹細工の猫つぐら、わらじ、手すき和紙で作った人形座ぶとん、名刺入れ、札入れや、川魚の加工品や蜂蜜、高原花豆、栃の実を活用した「栃の実せんべい」や手打ちソバ、ちまき、山菜やきのこを加工した物などである。どれも手作りで、心のこもった品物である。座卓やテーブルは、東京やその他各地に卸されており、わざわざ遠くから買いに訪れる人もいる。

##### c. 温 泉

温泉は、小赤沢、屋敷、和山、切明に点在しており、屋敷と和山の温泉は個人経営である。秋山郷で一番新しく出来た温泉は、小赤沢の楽養館であり、この温泉は村営として昭和59年に作られ、一年中営業しており村の人々もよく利用している。この泉質は鉄分と塩分が酸化した赤褐色の色をしたもので、皮膚病や神経痛などに効く。利用状況は7月から8月が特に多く、一日に約70～90人の人々が利用している。切明温泉は秋山郷の最

も奥にあり、一番古い温泉であり、露天風呂と河原風呂がある。河原風呂とは河原の石を取り除いて砂を掘ると湯が湧き出て自分だけの温泉が出来るというものである。次に、のよさの里は江戸時代の文人鈴木牧之にちなんで、その当時の秋山郷の暮らしと文化を再現した牧之の宿で岩風呂と桧風呂があり、国が経営している。

## (2) 民宿の発展

### a. 民宿とは

小赤沢地区には9軒の民宿と1軒の旅館がある。旅館と民宿とは呼び名での区別であり、登録するときの広さの基準が違うのみである。登録時には民宿ではなく、簡易宿所という名前を使っている。旅館の基準は和室が5室以上、フロントが必要で、 $3.3\text{ m}^2$ （2畳）に対して1人の広さが必要となっている。それに対し民宿の基準は、1部屋4.5畳以上、 $33\text{ m}^2$ 以上の建物が必要とされている。（これを洋室に変えたものが、ホテルやペンションである。）

### b. 旅館の成立

小赤沢地区は、苗場山山頂と越後湯沢方面との中間点であるため、登山客にとってちょうど良い休憩地であった。苗場山には山小屋がなかったため、登山客は信州秋山郷の玄関口でもあり、登山口でもある小赤沢集落の旅館、秋山館を休息所として利用した。この秋山館は、明治9年に旅館として開設され、部屋の一室を貸す形で始められた。利用客の多くは新潟の人であり、登山客はここを中継点とし、登山をして帰路についていたそうである。当時の建物は、洪水で流されてしまったため、大正5年に現在のものに再建された。この秋山郷は、小赤沢集落の中で、最も古い宿である。ここに集まるお客さんは、なじみの人や口こみで集まった人達が多い。秋山館の満室時には60人ぐらいの人が宿泊出来、現在の年間利用客は約1000人に達している。交通路が整備されたことにより、苗場山3合目まで自家用車で行けるようになったため、宿泊せずに、休憩所としてだけ利用され

るようにもなった。こうして秋山館は小赤沢集落のみならず秋山郷における宿泊施設の基盤を作ってきた。

### c. 民宿の発展

現在は民宿も9軒経営されるまでに宿泊施設が発展してきた。民宿を経営している家は、昭和42年に役所から民宿経営の話があるまでは、農業や木地師の家庭であった。当初は1軒につき5～6名ずつ宿泊する形で経営が始まり、昭和42年に苗場山山頂にヒュッテができ、全国的に民宿ができて来たこともあり、秋山郷にも民宿経営の話が出て来た。

観光化されていないそのままの自然を楽しんでもらおうとしているため、特別な観光施設は作られていない。昭和62年頃には、民宿を建て直し、規模を拡大する家も出て来た。現在では1軒の民宿に15～30人が宿泊することが出来、1軒当り年間2～300人の人が訪れる。苗場山の登山客を始めとして、釣り、避暑、山菜等を目的に観光客が来る。宿は家族で経営しており、中には女手一人で行っている所もある。忙しいときに近所の人に手伝ってもらい、経営が成り立っている。宿泊費は、どの宿も同じ料金で、秋山郷観光協会（秋山郷役場支所）で均等にお客が割り当てられるようにされている。民宿を経営している家庭では、民宿からの収入が家計収入の大半をしめており、そのほか役場、木工場、山菜工場で働く夫（配偶者）や息子の収入のある家庭もある。ただ民宿だけの収入で生活が成り立っている家庭はない。民宿で出す食事は自家栽培の野菜が中心で、いわなや山菜も取り入れ、自給的色彩が強い。

現在宿泊施設を経営しているのは、ほとんどがお年寄りで後継者のいる家庭は少ない。後継者のいる家庭では、既述のとおり民宿の規模を拡大している。しかし家族の健康状態が悪く休業している民宿もあり、そのため現在経営されているのは8軒である。民宿の利用者は着実に増加しており、それ故に建物の増改築がこの数年来実施されている。当地で民宿が営業され始めたのは昭和42年であるが、9軒の民宿が相次いで開業して以来その数は変わっていない。民宿を新規に開業したり、規模を拡大

して営業する為には若年層が少なく、人手不足がネックになり民宿の現在以上の発展には限界がみられる。

#### 4. 日常生活の変貌

##### (1) 生活環境の変化

###### a. テレビ・ラジオ

小赤沢地区にテレビが普及したのは、昭和30年代後半から40年代前半である。家庭により個々にアンテナを使用、又は共同アンテナを使用して電波を受信している。受信チャンネルは、信越放送（TBS系）、長野放送（フジ系）、テレビ信州（日本テレビ系）、NHKテレビ、NHK教育、新潟民間放送の6局である。NHK系列については、ほとんどの家で美しい画面で見ることができるが他チャンネルは山際の家ほど画面が映りにくく、2～3チャンネルほどしか見ることができないのが平均的である。ラジオもNHK系列の放送は聞くことが可能だが、他の放送は雑音も多く、聞きとりにくい。まれに東京からの放送が聞こえることもあるが、音声は良くない。

###### b. 新聞

ほとんどの家庭で、『信濃毎日新聞』を購読している。夕刊は無く、朝刊が昼頃に配達されるのみである。配達方法は、部落へまとめて1カ所に配達され、各々が取りに行く形式を採っている。

###### c. 部落内有線放送

部落内にスピーカーから流される放送で主に、農時放送、部落の広報、伝言などに利用される。夕方には昔話なども放送される。

###### d. 郵便

1日1回午後3時に郵便局でポストを回収、午後3時30分に津南町より定期バスが来て、そのバスに郵便物を渡す。村人への配達はその配達員が郵便局から受け取り各々の家庭へ届ける。番地は書かなくても姓名を正確に記せば無事に届くそうである。小赤沢から東京への郵便物は順調にいけば翌日届く。

## e. 幼稚園

小赤沢に保育所があり、現在10名が通っている。旧秋山小学校校舎を使用し他集落からも通っている。

## f. 小学校

栄村立秋山小学校へ通う。所在地は屋敷集落にあり、総生徒数は19名でその内訳は、1年－4名、2年－3名、3年－4名、4年－6名、5年－0名、6年－2名である。小赤沢から2km強の距離にあり徒歩で約40分、給食も行なっている。これは分校ではなく本校となっている。

## g. 中学校・高校

中学校は森宮の原にある栄村立栄中学校（本校）へ通う。高校は飯山北又は南高校が主で、津南高校へ通う者もいる。津南高校は新潟県立の高校のため越県通学となり、通常は許可されていないが、秋山郷は特別許可地域となっている。中学・高校共に毎日通学するのは時間的に困難なので、寮生活をしており、土日休日のみ自宅へ帰ってくる。

## h. 医者・薬局

秋山診療所があり、森宮の原から週2回医者がくる。通常は保健婦がいて世話をしている。薬局は無く、必要な時は診療所へ薬をもらいに行く。またほとんどの家庭には富山の配置薬が常備されている。

## i. 買い物

日常の買い物は十日町や津南町から移動スーパーが来る。いろいろな種類のものがほとんど毎日くるので特別不便な事は無い。特別な買い物がある時は津南町や十日町へ平均して月2～3回出向く。野菜は自給自足が中心である。

## j. 交通手段

バスは1日3本津南町まで結ばれており、冬期でも運行している。切明方面へは夏季のみ運行している。またほとんどの家庭に自家用車があるため、一年を通じ通勤、病院通い、買い物等に行く時等に使用されている。10年前迄は、特に冬場の交通手段が無く、道路も整備されていなかったの  
で、食料不足が深刻だった。

### k. 主な年中行事

現在でも残っている年中行事としては、

- ① 6月第3土曜日一苗場山山開き。
- ② 7月土用午の日一風呂に薬草を入れて仕事で疲れた体を休める。
- ③ 8月第1日曜日一焼き畑。
- ④ 9月初（台風の季節）一風祭り。大風が来ないようにみんなで祈る。
- ⑤ 9月3日一苗場神社秋祭り。夕方から朝迄、秋山民謡で“からす踊り”を踊り続け、花火大会や演芸会等、村中で楽しむ。
- ⑥ 11月10日一十日夜。収穫が終わる頃もちをついて収穫を祝う。  
昔はこの祭りの後、出稼に出掛けて行った。

### l. 生活上の問題点

生活上での不便さは、最近大分無くなってきた。道路の整備により交通の便が良くなった事で、かつて大問題であった冬場の食料不足等の深刻な問題も解消された。これに代わって現在最大の問題点は若者が成人するにつれて村を出て行ってしまいう事である。この理由としては、若者が農作業等の労働を嫌う傾向にあり、かと言って若者が働ける勤め口も無い事が挙げられる。また、嫁不足も深刻な問題である。

### m. 感想

何人かの住民に小赤沢集落の日常生活について聞いてみたが、秋山郷の人々は皆暖かく、東京のような都会では味わえないような人情味のある方ばかりだった。私が会った人達は、みんな口をそろえて、「秋山郷は本当に良い所だ。秋山を出て行く気持ちは全く無い」と断言していたのが印象的だった。

日常生活を調べてみて、“隔絶山村”という言葉が頭に焼きついていたので、さほど不便さが無い生活に拍子抜けしてしまった。都会のような洒落た、近代的な施設はなくても、生活に必要な物はすべて入手は簡単である。東京の若者の感覚として感じた事は、秋山郷の人々は、夜10時頃には床に就き、11時には皆寝てしまうという事である。彼らの夜11時が、私達東京の若者の朝2時頃にあたる。

## (2) 食生活の変化

### a. 過去の食生活

小赤沢地区の昭和20年頃(約40年前)までの主食はアワやヒエといった雑穀主体で、特にあんぼ(後述)は人々の生活に欠くことのできない栄養源であった。あんぼとは昔、どの家庭にもあったいろりの灰の中で焼いて食べる朝食で、原料は食料事情の良い時でソバ粉、悪い時は栃の実を使っていた。この栃の実は山に自生する栃の木になる実で、天日に干し一晩水につけ、皮をむいてから湯で煮てアク抜きをするという、たいへん手間のかかる食材だった。実の収穫は9月以降で特に冬の重要な栄養源として用いられた。その他、山々に囲まれた秋山郷では、山に住む動物も蛋白源として利用された。カモシカやうさぎは美味で、数も多く獲れたが、熊は狩猟仲間ではほとんど分けあってしまうので、一般の人々の口には入る機会がなかった。あんぼや肉以外には、ソバやアワ飯が食べられたが、おかずが生みそや菜や大根といったそまつなもの中心だった。もちろん正月料理といっても名ばかりで、元旦にはアワでもちをつくった。秋山郷においては、食生活がそのまま生命存続という問題とかかわりをもってくるので、かなりの厳しい生活をしいられたといえる。そういった悪条件の中で人々は、“カンノ”と呼ばれる焼畑農業を行うことで食生活をまかなってきた。

### ○秋山郷の日常食の構成(昭和30年頃迄)

朝食 — 粟, 稗などのあんぼ

昼食 — 粟飯(チョハンか再びあんぼ)

夕食 — 粟粥

### b. 現在の食生活

現在の秋山郷での食生活は、ほぼ都市のものと変わらない。アワやヒエといった穀物は姿を消し、村にあるよろず屋の店頭で2, 3百グラム位の袋詰めをなつかしさを購入する程度である。昨今の健康ブームを反映し、キビを栽培する家庭もあるくらいになっている。よろず屋ではそろわない生鮮食料品も週二回、十日町からやってくる移動スーパーで充分



まかなうことができ、都市の食生活とほとんど変わらない。

以上、秋山郷における食生活の変遷は、人々の生活にも、健康にも大きな影響を及ぼし、かつて飢饉で消えていった村々の姿さえ、しのぶことはできなくなっている。

### c. 秋山郷の特産食物

○あんぼ…直径が8cm程の饅頭。ヒエ、アワ、栃の実、ソバ粉などを原材料とし、熱湯を加えながらこねる。蒸した後再びこね、ダンゴ状にする。中味に大根菜やウツギの葉のみそあえを入れる。（現在は食べていない）

○山 菜…11月～3月を除いて、それぞれの季節にフキノトウ、コゴミ、ゼンマイ、モミジガカ、マタタビの実が楽しめる。8月～10月はキノコが豊富で、天然のマイタケやナメコが美味である。

○手打ソバ…ソバのつなぎに山ゴボウの葉を利用しているのが他地域のソバとは異なった特徴である。

○イワナ…中津川の清流で捕れる。

## む す び

戦後の高度経済成長の始まる昭和30年以前まで、地形的に外部と隔絶され冬季の豪雪により交通不便で隔絶山村と称されていた秋山郷は道路整備とバスの開通、観光化（温泉、民宿）により、かつての暗いイメージはなく活性化して来ている。

しかしわが国の経済がソフト化、サービス化を中心とする第3次産業の時代を迎え、また米を始めとする農産物の輸入自由化の方向にある現状のもとで秋山郷の経済の将来は決して明るいものとは言えない。

労働力不足からハイテク産業の工場の地方立地が進んで来ている昨今でも、東京系企業の進出も秋山郷への入口である津南町までであり、地形上平野部分に恵まれず、鉄道・高速道路から離れた当地区までは進出していない。

秋山郷としては各地に湧き出る温泉を中心に冬のスキー、夏の登山、焼畑、魚釣り、春秋の新緑、紅葉を売物に、素朴な山菜料理、木工品を伴な

った民宿による通年観光化が今後の生きる途として考えられる。

交通手段としては距離的にはJR飯山線が近いが、マーケットの大きい東京との時間的距離では上越新幹線越後湯沢駅、関越自動車道塩沢石打ICとのアクセスの整備が最重要の課題である。

末筆乍ら今回の野外実習にご尽力、ご助言をいただいた東京学芸大学市川健夫教授、白坂蕃助教授、現地でお世話になった東京大学山口岳志教授、東京農業大学田村勝正教授、現地調査でご協力をいただいた地元栄村役場、宿泊させていただいた民宿光荣荘の皆様を始めとする小赤沢地区の皆様にお礼申し上げます。

(岸本真由子、今井直子、右近恵奈、小幡玲子、平岩美智子、細野陽子、鈴木利恵、新保奈津子、山田真美、上野智子、新島京子、山口葉子、野中由美子、北折美佐)

#### 参考文献

1. 高野史男(1951): 隔絶山村「秋山」の社会地理学的研究。信州大学教育学部研究論集 1.
2. 新潟県教育委員会(1971): 民族資料緊急調査報告書「秋山郷」。
3. 市川健夫(1971): 高冷地の地理学
4. 官栄二監修(1977): 北越雪譜
5. 市川健夫, 小林寛義編(1979): 長野県
6. 市川健夫(1961): 平家の谷~秘境秋山郷~
7. 田中磐(1980): しなの食物誌
8. 市川健夫(1982): 風土の中の衣食住
9. 関充夫(1983): 長野県中津川流域の秋山郷の就業構造, 駒沢大学大学院地理学研究第13号
10. 市川健夫・斉藤功(1985): 日本の森林文化
11. 青木栄一(1986): 電源開発と鉄道、鉄道ピクトリアル 1986-3
12. 日本地理学会(1990): 1990 年度春季大会巡検資料